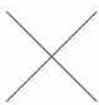


# 読書という 快楽の深め方

対談

岩田健太郎  
(感染症専門医)

内田樹  
(思想家・武道家)



## 山陰の少年の渴望

——おふたりは共著も出版されていますが、交流のきっかけは？

内田 初めて岩田先生にお会いしたのは二〇〇九年頃でしたか。医学書院の看護雑誌の企画で、当時は岩田先生、僕のことをほとんどご存じじゃなかった。「僕は内田さんの本をあまり読んでいないのですが、うちの妻がたくさん読んでいます……」と言われたのを覚えています。確か岩田先生もあの頃はまだ、専門書しか書いていなかったですよ。

岩田 そうですね。感染症や医学以外の一般書は書いていなかったと思います。

内田 それから東日本大震災の後に、岩田先生がリスク・コミュニケーションや教育をテーマにしたシンポジウムを主催されたときにゲストスピーカーのひとりとして呼んでくれて、少しずつ交流が始まったのですが、そのシンポジウムで一番、印象に残っているのが岩田先生の驚異的な頭の回転の速さでした。

僕も含め、ひと癖もふた癖もある登壇者たちの話を見事にまとめてゆく「猛獣使い」のようなムチさばきが素晴らしいです(笑)。岩田先生み



いわた けんたろう 神戸大学病院感染症内科教授。1971年、島根県生まれ。97年島根医科大学(現・島根大学医学部)卒業。沖縄県立中部病院、ニューヨーク市セントルークス・ルーズベルト病院、同市ベス・イスラエル・メディカルセンター、北京インターナショナルSOSクリニック、亀田総合病院(千葉県)を経て、2008年より現職。

「本を読むという活動そのものが自分にとってすごく快適だったのだと思います」

たいに頭の回転が速い人って、話が面白くなると途中でギアが変わって、通常のロジックとは違う飛躍をする。本当に頭のいい人の話を聞いているのは、高性能スポーツカーの助手席に乗っているような感覚で爽快なんですよ。

岩田 今のお話にもあったように、僕は妻に「面白いから読んだほうがいい」と、内田さんの本を勧められたのがきっかけですね。最初はフラ

ンス文学の研究者だというので「ベレー帽に丸眼鏡」みたいな人物を想像していたのですが、どんどん読んでいくと実際は全然違って。武道や日本古来の歴史、中国の漢文とか、いわゆるフランス現代思想みたいな枠には全く収まらないのが凄いなと思ったのと、「普通、それとそれは繋げないよね」というアナロジーの発想が常人じゃないというか、面白いなあと感じたのを覚えて

います。

——岩田先生の「本との出会い」は？

岩田 僕は島根県の宍道町(現・松江市)という、人口一人万人ぐらいの超田舎町で生まれ育ったのですが、父親は東京の大学を出て地元に戻ってきた人で、家には父が学生時代に買った古い文庫本なんかがたくさんありました。その中には古本屋の油紙に巻かれた夏目漱石の小説とか、旧仮名遣いの本とかも多かったのですが、小学生ぐらいになると、手あたり次第にそういう本を読むようになりました。

とにかく田舎町なので、小さな書店しかないし、月に五〇〇円ぐらいのお小遣いでは好きな本も買えませんから、学校の図書館の本をほとんど全部借りて読んでいました。なんにもない山陰の田舎で育った渴望感というか。第二次世界大戦後、みんなが読書に飢えていて、文庫本や雑誌が飛ぶように売れたと聞きますが、おそらくそれに近い感覚で、読書の質とかは全然考えず「ひたすら読めるものは読む」という感じでした。

これは「若者あるある」みたいな話ですけど、ある程度の年齢になると知的に背伸びをしたくなるんじゃないですか。

例えば高校生のときに好きだった女の子に

「どんな本を読むの？」って聞いたら、「カミュの『異邦人』が一番好き」とか言われると、自分は読んでないので慌てて読んだり、大学生のときに気になっていた女の子に「ヘミングウェイの『老人と海』は原書で読むと全然違うよね！」って聞いて、英語版のペーパーバックをかなりの時間をかけて読んだりとか。だから、妻と結婚したときも、妻の本棚に僕が読んだことのない本がたくさんあったので「これを読まないかと彼女に知的に追いつけないんじゃないか？」と思って、内田先生の本も一生懸命読んでわけです(笑)。

——子ども時代のお気に入りとか、特に夢中になった本はありますか？

岩田 小学生のときは江戸川乱歩の『怪人二十面相』とか、あの辺のシリーズを片っ端から読みましたし、あとは『ドリトル先生』シリーズとか。中学生のときは『刑事コロンボ』のノベライズ版なんかも夢中になって読んでいました。

もちろん、大学生になると知識を得るために本を読む機会も増えるわけですが、それも単に知識を得るための手段として読んでいたのかというところではなく、本を読むという活動そのものが自分にとってすごく快適だったのだと思います。

## 少女小説が広げてくれた世界

内田 僕は子ども時代、最初は漫画以外の本を読む習慣がなかったんですが、小学校三年ぐらいのときに、毎月一冊ずつ配本される講談社の『少年少女世界文学全集』を親が買ってくれて、「さあ、今日からこれを読みなさい」と言われて、毎月一冊ずつ読むようになりました。

最初は我慢して読んでいたのですが、だんだん本を読むのが楽しくなってきた、転換点は一〇歳ぐらいのときに、少女小説の配本が続いたんです。『若草物語』が最初で、面白くて何度も繰り返し読みました。それから『赤毛のアン』『あしながおじさん』『小公女』『アルプスの少女ハイジ』『愛の妖精』などと続いて、夢中になりました。そのときに生まれて初めて「自分が女の子になって世界を見る」という経験をしたんです。

それ以前は漫画でも小説でも、主人公はどれも少年で、いろいろ冒険をするのですが、少年には「内面」がないんですよね。思ったことをすぐ口にして、行動に移す。でも、女の子は違うんです。思ったことが言葉にならない。行動にならない。「女の子の身になって男の子に恋